

豊郷町隣保館だより

2021年6月25日発行 豊郷町隣保館 ☎0749-35-0611 No.207



陽射しの中、西光寺前の広場で話を聞いてくれる子どもたち

この昔話には、村を大切に思い、人を想いやるという、地域の願いが込められています。

日栄小学校3年生が総合学習で
大町と三ツ池に伝わる昔話を聴きました

* 『昔むかしのお話です。暑いお盆の八月十五日の夕方、あたりが少し暗くなると、大町と三ツ池の子どもたちは、浴衣を着せてもらい、小さな提灯をもって三人、四人、五人と手をつなぎ、集まってくるのです。子どもたちは、「提灯はいはい提灯はいはい。おかるさんにあげましょう。」とくり返しくり返し、声をあげながらお寺の周りを歩きます。この「提灯はいはい」という言葉なのですが、何の意味なのか、いつぐらいから言われ始めたのかもはっきりとはしていませんが、お盆の夕暮れに子どもが提灯を持って歩くということから、亡くなった「おかるさん」のことを想い、歩くようになったと伝えられています。

…その昔、「おかるさん」という子どもが大好きな心優しい女の子がいました。ある日、村で大きな火事が起こり、あつという間に村中に広がっていきました。あまりにも大きな火事なので、村の人たちはどうすることもできず見ていただけでしたが、ただ一人、おかるさんは自らの命も顧みず、火事から村を救おうとして炎の中に飛び込んでいきました。でも、その後大きな炎にのみ込まれ、亡くなってしまったのです。それから子どもたちは、お盆になると「提灯はいはい。おかるさんにあげましょう。」と言いながら、おかるさんを偲んで村の中を歩くようになったのです。*

○ ○ ○ (＊書籍「豊郷の昔ばなし」より参照)

村の子どもたちを思いやる『優しい気持ち』と火を消そうとした『強い気持ち』が伝わる物語【提灯はいはい】を真剣な表情で聴いてくれる子どもたちを見て伝え続けていくことの大切さを改めて感じました。